

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：21102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10385

研究課題名(和文) 思春期ピア・カウンセリングがピア・カウンセラー及び受講者の親性準備性に与える影響

研究課題名(英文) Effects of Adolescent Peer Counselling on Parental Readiness of Peer Counsellors and Students

研究代表者

佐藤 愛 (SATO, Megumi)

青森県立保健大学・健康科学部・教授

研究者番号：60315546

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、健やか親子21(第二次)における基盤課題B「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」の視点から、将来親となる世代である思春期への支援策の1つとして思春期ピア・カウンセリング活動の有効性を検証することを目的として調査した。ピア・カウンセラー自身の自尊感情尺度・自己肯定感尺度・親性準備性尺度の平均点は、養成講座前期講座受講前より受講後の方が高くなり、後期講座受講後は前期講座受講後より低下した。ピア・カウンセリング活動を受講した中高生の自尊感情尺度・自己肯定感尺度・親性準備性尺度の平均点は、受講前より受講後の方が高いが僅差であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、思春期ピア・カウンセリング活動がピア・カウンセラー自身の親性準備性に影響を与える可能性を示唆する結果が得られたことは大きな成果である。Covid-19の影響により受講者同士の交流が制限される中での実施であったにも関わらず本結果が得られたことは、特に意義があると考えられる。少子社会において、若者が親性準備性を育むための取り組みを構築することは重要であり、その対策の一つとしてピア・カウンセリング活動の有効性を実証していくことは重要である。

研究成果の概要(英文)：We investigated the effectiveness of adolescent peer counselling based on basic issue B, "Health Measures during Childhood/Adolescence toward Adulthood," in "Healthy Parents and Children 21 (second plan)" as one of the support measures for adolescents who will become future parents. The average scores of peer counsellors' self-esteem, self-affirmation, and parental readiness were higher after the first semester of the training course compared with those before (participation in) the course. However, scores after the second semester were lower than those after the first. The average scores of junior high and high school students who participated in peer counselling activities were higher after the course than before, but the difference was slight.

研究分野：生涯発達看護学関連

キーワード：思春期ピア・カウンセリング 親性準備性

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

思春期は将来子どもを育てる立場になった時、役割を十分に果たすことができるように心理的・社会的準備をする時期であるといわれる。この親性準備性を発達させるためには、幼い子との接触経験の機会を多くすること(松岡ら、2000)の他に、自分自身の性を受容することや自己や他者に対する信頼感を獲得できるような支援が必要であると報告されている。

一方、思春期ピア・カウンセリングは、思春期の子ども達の自己決定力・問題解決能力を高める支援として、WHOを始め国際的レベルで高い評価を得ている方法であり、思春期のピア・サポートの推進は健やか親子21(第2次)の基盤課題Bにおける具体的な取り組み方策例の一つともなっている。ピア・カウンセリングの有効性については、受講した中高生の自己効力感や自尊感情に対する影響が数件示されている(前田ら、2007)(五十嵐ら、2010)。しかし、ピア・カウンセラー自身への変化に関する報告は少ない。

### 2. 研究の目的

思春期ピア・カウンセリング活動は、ありのままの自分を認め受け入れる(自尊感情・自己肯定感)ことや、他者との違いを受け入れながらお互いを尊重して付き合うことの重要性などについて、ピア・カウンセラーが中高生とともに考える活動である。このことから、ピア・カウンセラーや活動に参加した中高生たちの親性準備性の発達にも影響を与える可能性があるのではないかと考えた。

そこで、本研究の目的を以下の2点とした。

ピア・カウンセラー自身の親性準備性、自尊感情、自己肯定感に与える影響の有無を明らかにする。

ピア・カウンセリング活動に参加した中高生の親性準備性、自尊感情、自己肯定感に与える影響の有無を明らかにする。

### 3. 研究の方法

#### 1) 目的の方法

(1) 対象：思春期ピア・カウンセラーとして活動を希望する大学生。

(2) データ収集方法：

ピア・カウンセラー養成講座への参加を募集する。

受講を希望した大学生に受講前の調査を実施する(自尊感情、自己肯定感、親性準備性に関する質問紙調査)。

養成講座を実施する(前期講座・後期講座を各1回実施。後期講座は前期講座から半年後を目安に開催)。

前期講座・後期講座受講後に質問紙調査を実施する(自尊感情、自己肯定感、親性準備性に関する質問紙調査)。後期講座後の調査では、具体的な活動状況についても調査する。

(3) 質問項目：自尊感情についてはローゼンバーグの自尊感情尺度邦訳版を使用した。自己肯定感については田中(2005)の作成した自己肯定感尺度を使用した。親性準備性については小林ら(2016)の作成した大学生用の親準備性尺度を使用した。自己肯定感尺度及び親準備性尺度については事前に作成者から許可を得て使用した。

(4) データ分析方法：回収した調査票のデータをコンピュータに入力し統計学的に分析する。

#### 2) 目的の方法

(1) 対象：思春期ピア・カウンセリング活動に参加した中高生。なお本研究において思春期ピア・カウンセリング活動とは、各中・高校が希望するテーマにもとづいて正しい情報や知識・価値観・スキル・行動をわかちあうピア・エデュケーション(高村、2015)をいう。

(2) データ収集方法：ピア・カウンセリング活動参加前後の自尊感情、自己肯定感、親性準備性に関する質問紙調査を実施する。

(3) 質問項目：自尊感情についてはローゼンバーグの自尊感情尺度邦訳版を使用した。自己肯定感については田中(2005)の作成した自己肯定感尺度を使用した。親性準備性については牧野ら(1989)の作成した「親になることへの準備状態」測定尺度を使用した。自己肯定感尺度及び親準備性尺度については事前に作成者から許可を得て使用した。

(4) データ分析方法：回収した調査票のデータをコンピュータに入力し統計学的に分析する。

### 4. 研究成果

#### 1) 目的の結果

本研究は、Covid-19の影響により、2018~2020年度までの予定であったところを2022年度まで2年間延長して実施した。しかし、2021年度は陽性者の爆発的な増加により、養成講座の開催自体の中止を余儀なくされ調査が実施できなかった。また2018・2019年度は通常の体制での実施であったが、2020・2022年度は感染予防対策を講じた上での開催としたため、受講者同士の交流が制限された中での実施となった。

ピア・カウンセラー養成講座を受講し、本調査に参加した対象者は、2018・2019・2020・2022年度を合わせて前期講座受講前 33 名、受講後 22 名、後期講座受講後 8 名であった。自尊感情尺度の平均点は前期講座受講前 25.6 点、受講後 29.5 点、後期講座受講後 27.1 点であった。自己肯定感尺度の平均点は前期講座受講前 23.2 点、受講後 25.9 点、後期講座受講後 23.8 点であった。親性準備性尺度のうち乳幼児への好意感情得点の平均点は前期講座受講前 41.3 点、受講後 43.3 点、後期講座受講後 40.9 点であり、育児への積極性の得点の平均点は前期講座受講前 42.7 点、受講後 46.8 点、後期講座受講後 43.4 点であった。各尺度の平均点について、前期講座受講前より受講後でいずれも有意に得点が高かった。(表 1)

表 1 前期講座受講前後における各尺度の平均点

		平均点	P 値
自尊感情	受講前	25.6	< 0.001
	受講後	29.5	
自己肯定感	受講前	23.2	< 0.001
	受講後	25.9	
親性準備性 (乳幼児への好意感情)	受講前	41.3	0.012
	受講後	43.3	
親性準備性 (育児への積極性)	受講前	42.7	0.001
	受講後	46.8	

後期講座受講後の調査において、ピア・カウンセラーが行った活動内容は、1対1の相談活動、複数の対象者への情報提供・共有活動、勉強会への参加、仲間同士のブラッシュアップ(相談活動)であった。1人当たりの活動回数は平均 2.1 回であった。

本結果により、思春期ピア・カウンセリングはピア・カウンセラー自身の自尊感情・自己肯定感・親性準備性に影響を与える可能性が示唆された。しかし、対象者が少なかったこと、Covid-19 の影響により活動が制限されている中での調査であったこと等の影響は否めず、今後のさらなる調査が求められると考える。

## 2) 目的の結果

中高生を対象とした調査は 3 年目から実施する予定としていた。活動は、2020 年度に高校 1 校、2022 年度に高校 1 校であった。2021 年度は Covid-19 の影響により実施できなかった。

また活動は、2020 年度および 2022 年度ともに感染予防対策を講じた上での開催であったため、ピア・カウンセラーと中高生の交流や中高生同士の交流が制限された中での実施となった。

2020 年度及び 2022 年度の対象者は 216 名、回答者 197 名、有効回答は受講前 180 部、受講後 166 部であった。自尊感情尺度の平均点は受講前 31.6 点、受講後 33.0 点であった。自己肯定感尺度の平均点は受講前 23.2 点、受講後 23.5 点であった。「親になることへの準備状態」測定尺度の平均点は受講前 60.0 点、受講後 60.5 点であった。各尺度の平均点に有意差は認められなかった。

本研究では、思春期ピア・カウンセリング活動に参加した中高生の親性準備性、自尊感情、自己肯定感に与える影響を十分に明らかにできたとは言いがたい結果であった。その理由として、Covid-19 の影響により活動の要となるピア・カウンセラー及び中高生間の相互交流がほとんど行えない中での調査であったことが挙げられる。ピア・カウンセラーと中高生が知識や情報・価値観・スキル・行動をわかちあい、共感・共有していくことが親性準備性にも影響すると考えて計画したが、その最も重要な部分の影響が十分に検証できなかった。今後のさらなる調査による検証が求められる。

## < 引用文献 >

- ・五十嵐世津子, 岩間薫, 千葉貴子, 森圭子, 西野加代子, 鍵谷昭文 (2010) 大学生による中学生への思春期ピアカウンセリングの有効性, 弘前大学大学院保健学研究科紀要, 9 巻, 49-55.
- ・小林真, 福田結衣 (2016) 大学生用の親準備性尺度の開発, とやま発達福祉学年報, 7, 47-52.
- ・前田ひとみ, 高村寿子, 渡邊至, 大石時子 (2007) 高校生を対象とした大学生による思春期ピアカウンセリングの評価 ( ), 南九州看護研究誌, 5 (1),
- ・牧野カツコ, 中西雪夫 (1989) 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育 (第 1 報) - 「準備状態」の測定尺度の作成, 日本家庭科教育学会誌, 32 (2), 51-53.
- ・松岡治子, 和田佳子, 花沢成一 (2000) 青年期男女における母性度・父性度の発達に関連する要因の検討 - 親性準備性の研究 ( ) -, 母性衛生, 41 (4), 500-505.
- ・高村寿子編 (2015) 主体的な生き方を支える ピア・カウンセリング実践マニュアル 改訂新版, 小学館, 東京.
- ・田中道弘 (2005) 自己肯定感尺度の作成と項目の検討, 人間科学論究, 13, 15-27.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐藤愛、高橋由美子、佐々木知映
2. 発表標題 思春期ピアカウンセリングがピアカウンセラーの親性準備性に与える影響
3. 学会等名 第36回日本助産学会学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高橋 由美子  (TAKAHASHI Yumiko)  (40712344)	青森県立保健大学・健康科学部・助教   (21102)	
研究分担者	佐々木 知映  (SASAKI Chie)  (90805805)	青森県立保健大学・健康科学部・助手   (21102)	2021年度まで

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------